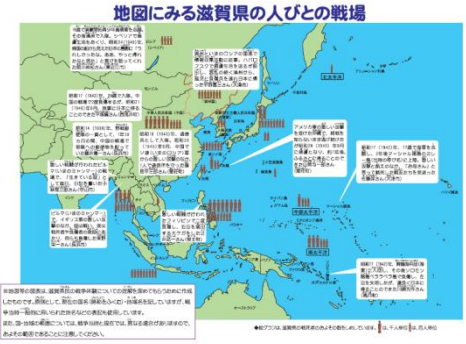
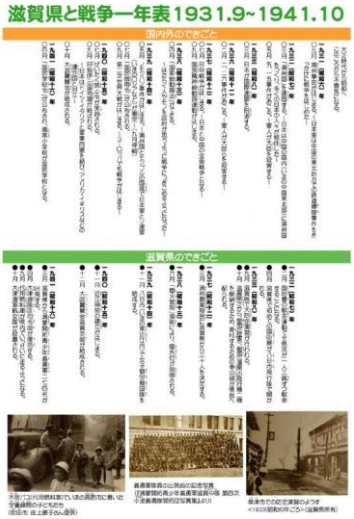
貸し出しパネル　Ｂセット

１．地図にみる滋賀県の人びとの戦場





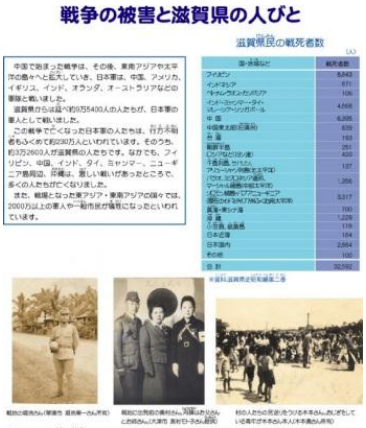
２．滋賀県と戦争

年表１９３１．９～１９４１．１０

３．滋賀県と戦争

年表１９４１．１２～１９４５．８．１５

４．戦争の被害と滋賀県の人びと



　この戦争で亡くなった日本軍の人たちは、行方不明者もふくめて約２３０万人といわれています。そのうち、約３万２６００人が滋賀県の人たちです。なかでも、フィルピン、中国、インド、タイ、ミャンマー、ニューギニア島周辺、沖縄は、激しい戦いがあったところで、多くの人たちが亡くなりました。

５．ふるさとを離れて－戦地の人びと

　戦争が起こると、多くの男性には、軍隊に入るようにという書類（召集令状）が届き、やがては戦地（戦争が行われている場所）へと行かなければなりませんでした。結婚して子どもがいる人たちにも召集令状は届きました。長い戦争の間、何度も召集令状が届き、そのたびに戦地へ行った人たちもいました。家族や地域の人たちに見送られ、それぞれの暮らす地域から出かけていきました。

６．ふるさとを離れて－少年たちの戦場

　男性は２０歳になると、兵士として適しているかどうか調べる徴兵検査を受け、合格者のなかから選ばれると軍隊に入らなければなりませんでした。もっと若くして軍隊に入ることを希望する人たちには志願兵という制度がありました。いまの中国の東北部に日本軍が中心となってつくった「満州国」には、土地を耕して農業をしながら、兵士として国境などを守るために志願して出かけていった満蒙開拓青少年義勇軍（満州開拓青少年義勇隊）の少年たちがいました。

７．ふるさとを離れて－帰れなかった人びと

戦場では、ひとたび爆撃や銃撃があると、多くの人がケガをしたり、命を落としたりしました。また、十分な食べ物や薬がないところでは、病気のために亡くなる人たちもいました。戦争が終わって、日本に帰ることができても、戦場で受けた傷や病気で苦しむ人たちもいました。そのなかには、ふるさとに帰り着く前に、帰りの船や上陸した近くの病院で亡くなる人もいました。

８．「召集令状」を届けて－兵事係という仕事

戦前の日本の男性には、およそ２０歳から４０歳（昭和１８（１９４３）年からは４５歳）まで、国（軍隊）が命令すれば軍隊に入らなければならないという「兵役の義務」がありました。 市町村の役場には、「兵事係（主任）」という仕事がありました。

９．東近江の若者と戦争

八日市中学（今の八日市高校）の生徒の中には、八日市飛行場の八日市陸軍航空分廠（飛行機の整備や修理をする工場） で昭和 19（1944）年から戦争が終わるまで働いていた若者がいました。東近江市出身の若者の中には、海軍に志願し航空隊に入隊した人がいました。台湾やフィリピンで亡くなりました。爆弾を積んだ飛行機で体当たり攻撃し（特攻）、戦死した人もいました。

１０．子どもたちの空襲体験

１１．私たちは７月 24 日のことを忘れない
―空襲と御園の子どもたち

昭和 20(1945)年の東近江市の御園小学校でのできごとです。その頃、小学校は国民学校といっていました。それは、７月 24 日、夏休みの前日のほんの３０分間の空からの攻撃（空襲）でした。空襲を体験した御園国民学校の子どもたちは、その日のことを決して忘れることはできません。

１２．子どもたちが描いた戦争
―戦争のころの絵と日記

１３．「少国民」とよばれた子どもたち

昭和１６（１９４１）年４月、小学校は「国民学校」という名前にかわり、子どもたちは「少国民」とよばれるようになりました。それには、子どもたちは小さくても立派な国民で、戦争に協力しなければならないという意味がこめられていました。

そのころ、おやつはもちろん、食べ物は不足していました。くつや服、教科書やノートなども十分ではありませんでした。子どもたちはいろいろなことをがまんしながら過ごしていました。

１４．学童疎開
―甲南町へやってきた大阪の子どもたち

昭和１９（１９４４）年８月３１日から９月１日にかけて、空襲がせまった大阪市内から、滋賀県に大阪市内の小学生約１万１千人がやってきました（「学童（集団）疎開」といいました）。

９月１日、いまの甲賀市甲南町へは、大阪市立稲荷国民学校４年生が疎開してきました。集団で生活しながら南杣国民学校（いまの甲南第二小学校）へ通っていました。

１５．滋賀県の空襲被害のようす

１６．変わるくらし－「銃後」とよばれて

地域では、米や麦・イモなどをたくさんつくって国に出さなければならない「供出」や、戦地に行く兵士の見送り、「空襲」（敵の飛行機による攻撃）に備えた防空演習（火を消したり、ケガ人を手当てしたりする訓練）、国内が戦場になったときに備えて竹やりで敵をたおすための訓練などが行われました。こうした戦争を支える地域や人びとは「銃後」とよばれ、その中心は女性たちでした。

１７．はたらく中高生－学徒勤労動員

戦争が長びくと、多くの男性が兵士として戦場に行ったため、働く人たちが不足してきました。そのため、今の中学生や高校生の年齢の生徒たちは、授業の合間、働き手の男性が戦地へ行った家族のもとで、稲刈りなどを手伝うようになりました。やがて、生徒たちは、学校の授業をやめて、琵琶湖の干拓の作業や兵器をつくる工場などで働かなければならなくなりました。

１８．飛行場のまち八日市

江戸時代から八日市ではタタミ百畳くらいの大凧が沖野ヶ原であげられていました。そこに大正４（１９１５）年、民間の飛行場が建設されました。

その後、八日市飛行場は陸軍の飛行場となり、戦争中は、多くの部隊が戦地へと向かいました。敵の飛行機などに体当たり攻撃する特攻隊の訓練も行われました。 戦争の終わりごろには、飛行場に対して空襲がたびたびありました。

１９．変わるくらしー金属供出と代用品

変わるくらし
ー金属供出と代用品

戦争が続いていくと、鉄砲や弾など兵器をつくる材料となる鉄や銅などの金属が不足してきました。そこで、国は鉄などでできたナベやアイロンなどの家庭用品やお寺の鐘などを出すようにという命令を出しました。それを「金属供出」といいました。人びとは、陶器やアルミなどでつくられた「代用品」を代わりに使うようになりました。

信楽では陶器製の「地雷」や「手榴弾」という兵器をつくるようになりました。

信楽焼でつくった兵器

信楽は昭和初期の生産が盛んなまちでしたが、戦争が始まってしばらくすると、陶器製の地雷や手榴弾をつくりはじめました。

地雷は伝統の登り窯で焼きました。1300度の高温で焼くので、陶器といっても金属に近い固さになったそうです。

地雷つくりには、人手不足から国民学校高等科(小学6年生の上の2学年。いまの中学1年・2年の年齢)の生徒たちも手伝いにきました。

昭和19(1944)年4月、雲井国民学校(いまの雲井小学校)高等科1年生の中島量子さんは、学校のみんなと、地雷を焼くために山から松の木を切った薪木を運びました。そして2年生になると、地雷の形の中に詰めた粘土を取り出したり、サンポーパーでみがいたり、それを日光で乾かしたりする手伝いをしました。

信楽国民学校高等科1年生の近藤秀さんと松本敏明さんも地雷つくり等手伝いました。松本さんは、「冬場、信楽は凍るほど冷たい。粘土は水を混じながらするのでつらかった。」といいます。

信楽では、陶器製のボタンや瀬戸ものは、五徳(火鉢などのなかにおいて、ナベなどをのせるための台)などの代用品もつくられました。

デンシャミチヤ、イケヘアソビニ
行ッテハイケマセン
ー戦場と家族をつないだハガキー

昭和18(1943)年9月、35歳の西村浅吉さん(東近江市出身)に召集令状が届き、福井県の歩兵第115連隊に入隊しました。

浅吉さんは、妻のせつさん、小学1年生の忠一郎さんと5月に生まれたばかりの武さんの2人の子どもと4人家族でした。

昭和19(1944)年、浅吉さんの所属する部隊は、日本から5千キロ南のニューギニア島に渡りました。2月から6月にかけて、浅吉さんが戦地から送ったハガキが「家族のもとに届きました。9通目のハガキを最後に、浅吉さんから家族への連絡は途絶えました。

▲西村浅吉さんと一郎さん(東近江市 西村忠一郎さんご所有)

浅吉さんたちは、大津市石山で暮らしていました。浅吉さんは、日本と中国が戦争を始めた翌年、昭和13(1938)年に召集され、中国大陸に出かけて行きました。この写真を戦地まで持って行った浅吉さんは、1年半後、無事に帰ってきました。

「ハガキはようきましたなぁ。まわりであったことかわらせてくれといったら、こちらからも月にいっぺんくらいはハガキを出しました。」と当時を思い起こすせつさん。

小学2年生の忠一郎さんには、カタカナで書かれたハガキが届きました。「今、読んでもらった私に対する細やかな心づかいが身にしみて、自信があつくなる。」という忠一郎さん。

戦争が終わり、しばらくして、浅吉さんの帰りを待つ家族に、知らせが届きました。昭和20(1945)年6月12日、浅吉さんがマノクワリ(ニューギニア島の西側、現在のインドネシアにある町)の病院で戦病死したことを知らせる通知でした。

▲せつさんと武一郎さん(東近江市 西村忠一郎さんご所有)

２０．デンシャミチヤ、イケヘアソビニ
行ッテハイケマセン
ー戦場と家族をつないだハガキー

昭和 19(1944)年、所属する部隊は、日本から５千キロ南のニューギニア島に渡りました。２月から６月にかけて、戦地から送ったハガキが家族のもとに届きました。９通目のハガキを最後に、家族への連絡は途絶えました。